

部活動における生徒の教師に対する信頼感と 教師の部活動指導観について

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
156034 稲垣知見

部活動における生徒の教師に対する信頼感と 教師の部活動指導観について

稲垣知見

生徒指導力高度化コース

要約：部活動の在り方に答えはなく、その運営は顧問の部活動指導観による。本研究では部活動が生徒たちにとって有意義なものになるために、教師はどのように部活動と向き合っていくべきかを、部活動の在り方と信頼感の形成という観点から実際の部活動の事例を交えて検討した。その結果、生徒にとって有意義な部活動を運営するには、教師自らの価値観に合った部活動指導観を持って部活動指導に当たること、かつ適切な指導によって構築する生徒の信頼感が必要だという結果に至った。また主体性を重視した指導や生徒の居場所感の充実について、教師自らの部活動指導観を深めることが有意義な部活動を運営する上で有効である。教師が部活動指導観を持つ意義とそれが及ぼす部活動への影響を理解した上で部活動指導観を持って部活動に向き合うべきである。

キーワード：部活動指導観 信頼感 モチベーション 居場所感 教師の負担

はじめに

近年では教師の多忙化が叫ばれる中、部活動は、身体的、精神的、時間的にも生徒や教師にとって大きな負担となっている。部活動は教育課程外であるため、学校教育における部活動という教育活動をどのように捉えるかは個人に委ねられている。しかし実際のところ、中学校や高等学校に勤めるほとんどの教師は部活動に関わる。教師として生徒と関わる場である以上、教育活動の一環として部活動指導に当たるべきだと考える。部活動に所属することを生徒に義務付けている学校もあり、生徒にとっても部活動は学級や学年以外において重要なコミュニティになる。果たして労力を要する部活動は、子どもたちに何を経験させ、どのような教育的意義があるのか。

部活動は、教科指導のように指定された指導内容もなければ評価も必要なく、顧問が持つべき部活動指導観を示すようなものは無い。同じく部活動の意義や部活動指導の在り方についての研究はあるが、顧問はどのような部活動指導観を持つべきかといった研究は無い。さらに部活動指導観を持って部活動指導に当たっていても、生徒たちにとって有意義

な部活動となる保証はない。つまり教師の指導が生徒に対して有効に働くかは、その教師との関係性に大きく影響する。

そのため本研究では、生徒と教師の関係における信頼感を取り上げる。そして部活動における顧問の部活動指導観と生徒の教師に対する信頼感がどのように部活動の運営に影響するかを検討する。部活動が生徒にとってよりよい教育活動になるために教師それぞれが部活動指導観を持つ意義と、どのような観点で部活動指導観を持つべきかを考察する。なお本研究において、部活動指導観を部活動における部活動指導観と定義する。

第1章 部活動の意義

第1節 部活動の位置づけと意義

まず部活動がこれまでにどのような変遷を遂げてきたのかを整理する。神谷（2015）を参考にまとめると表1のようになる。

表1 部活動の変遷

年代	位置付け	意義
1870	大学での自主的な活動	スポーツを楽しむ
1913	体育の学習指導要領「教科外で実施されるもの」	心と体の鍛錬
戦前	（教育の軍国主義化が進む）	
1947	子どもの自発的活動を重視した「学校生活のうちで重要な役割を果たすべき分野」※自主的な参加	自由研究
1958	学習指導要領で全員必修	エリート選手養成
1969	「必修クラブ」と「課外の部活動」の二分化	
1977	必修クラブの関連領域としての部活動	道徳教育
1989	課外部活動を必修クラブの履修の代替措置として認める	個性・主体性を確立する
1998	必修クラブの廃止（学校で部活動を実施する根拠が不明確に）	
2000	方針「学校の実態に応じ土日などには活動を休止する」	
2008	学習指導要領「教育課程の教育活動と関連付けて実施される課外の活動」	

部活動の始まりは 1870 年代の大学生による自主的な活動であった。その後徐々に学校の公認組織となり過熱化して、1913 年（大正 2 年）に刊行された体育の学習指導要領の中で「体操科教育時間外に於て行ふべき諸運動」として特定の種目が教科外で実施することが認められた。1900 年代は教育の軍国主義化が進むにつれ、心と体を鍛錬して国のために奉仕できるような実践力をつける活動として利用されるようになっていった。

戦後は軍国主義の払拭を掲げ、1947 年（昭和 22 年）に「子どもの自発的活動を重視した学校生活のうちで重要な役割を果たすべき分野」として説明された。しかし軍国主義的

な風潮が風化するまでに、東京オリンピックの開催を背景に 1960 年代にはエリート選手養成の場として部活動が位置付けられ、勝利至上主義的な指導がなされた。

1960～70 年代には部活動の在り方が議論されるようになり、学習指導要領に含まれる必修クラブと「それ以外の自発的な課外の部活動」という位置付けで二分化された。しかしその区別は教育現場に浸透せず、1970～80 年代には「必修クラブの関連領域としての部活動」と位置付けられた。そのため、必修クラブと同様に部活動についても評価の対象となったが、何を評価する教育活動か、部活動の在り方への議論は迷走していく。

1980～90 年代では校内暴力が社会問題化した。部活動の必修化や体罰、シゴキ等を誘発し、生徒を管理する体制が強くなった。実際に生徒の管理によって、校内暴力や生徒の非行・暴徒化が収まった例も多く、テレビドラマにもなった。

1990～2000 年代には部活動に関わる個性・主体性、ゆとりが尊重されるようになり、競技成績の評価が子どもの個性の評価として捉え直された。一方で、競技成績の評価を背景にした部活動の過熱化がゆとりを奪っていると批判されてきた。教師の部活動への関わり方と教育的意義が議論される中、2000 年には「学校の実態に応じ土日などには活動を休止する」という方針が示された。

現在では学習指導要領総則に「教育課程の教育活動と関連付けて実施される課外活動」として書かれている。担当行政官によると、「教育課程ではなく学習指導要領に位置付く課外活動として教師が指導すべき内容として定義付けられている」という解釈を示している。

第 2 節 部活動の現状と課題

次にこれまでの部活動の意義や在り方についての研究を基に、部活動の現状や課題について整理する。第 1 節より、教育活動の一環としての明確な目的や必要性といった部分は具体的に説明されてこなかったことがわかる。それは、これまでに説明されてきた意義や目的としては、うまく位置付けられていないともいえる。

部活動の意義について、三木本・高橋（2008）は、「心の発達や成長、体力の向上・健康の増進、国際競技力の向上、文化振興」としている。心の発達や成長について、植草・松元（1996）は、「部活動を続けることで社会性の獲得に大きな影響を与えている」ことを明らかにしている。

さらに三木本・高橋（2008）は、「少子化による部員の減少、教師の多忙化、部活動に対する生徒と教師の意識格差」を部活動の課題としている。また教師の多忙化について中・山下（2002）は、「約 7 割の教師が指導力不足や生徒の価値観の多様化といった問題による

何かしらの悩みや負担を抱えている」と述べている。

では今後教師はどのような部活動を目指すべきか。これについて三木本・高橋（2008）は、「部活動の体制として学校を中核としたグループを形成し学校全体で進める（地域連携）ことと、多様な目的を持った生徒の受け皿（勝利至上主義にとらわれない）となることがこれからの部活動に必要とされてくる。」と主張している。

これらの研究より、部活動は生徒の心身の成長にとって意義のあるものだが、教師にとっては多様な考え方の生徒への対応に家庭や地域との連携が求められることが負担となっているのが現状であるといえる。

部活動の意義や目指すべき在り方が多く語られているが、教師たちがその現状を捉え、いかに部活動と向き合うべきかという研究は未だ少ない。以上より、教師の多忙化の解消と、求められる部活動の実現が同時に成立するのは難しいと考えられる。

第2章 信頼感について

第1節 思春期における信頼感

本章では、思春期における信頼感と、部活動における指導という観点から、生徒に及ぶ影響について検討する。

天貝（1995）は、「他者への信頼感は、対自的信頼（自己信頼）、対他的信頼（他者信頼）、不信、基本的信頼によって測られ、その質やバランスまたは安定性が重要になる。」としている。基本的信頼とは、その人の基本的な他者との関わり方についての考え方や価値観である。他人に対する信頼感は、幼少期に形成する親への愛着や思春期での人間関係によって形成される。思春期は、他者との関係性や身の回りの出来事から、心的な変化や価値観の構築といった心の成長への影響を受けやすい時期である。その時期に積み重ねる経験が子どもたちの人格を形成していくうえで重要である。特に中学生の信頼感形成について佐藤・松元（1990）は、「中学生以上になると、好きか嫌いかで教師の信頼感を判断する小学生とは違い、教師のネガティブな側面をも含めてトータルの判断をするようになる」とも述べている。つまり中学生にとって教師への信頼感とは、安心感や教師としての正当性を高く評価するだけでなく、教師を不信な部分も含めた“一人の人間”として捉えた信頼感を形成する。

特に学校生活での人間関係においては、生徒と教師が重要である。生徒と教師の関係について天貝・杉原（1997）は「中学生において信頼感は主に友人や教師との対人的関係性

を通じて自己存在を位置付ける役割を果たす」と述べている。このことより信頼感だけでなく自我同一性の形成においても、学校生活での人間関係は思春期において重要な意味を持つことがわかる。実際に思春期における教師との人間関係が学校生活にどのような影響を及ぼしているかについて、中井・庄司（2006）は「学校生活満足度において、教師に対する信頼感は学習意欲、教師との関係、規則への態度、特別活動への態度に影響する。また、教師に対する信頼感が高い生徒ほど友人関係の適応が高く、反対に教師に対して不信感を抱いている生徒ほど学校適応感が低くなる」ことを明らかにしている。

また教師に対する信頼感の生起について佐竹（2003）は、「信頼感は教師の尊重、肯定的特質、安定性、受容性、明朗性、親密性のある行動によって生起していくものである」と述べている。そして信頼感の認知について山本（2011）は、「信頼感の認知には、支持・理解・受容的な態度といった教師の生徒に対する姿勢が重要である」と述べている。

これらの研究より、信頼感は教師の人間性に基づいた言動によって形成されるが、生徒との直接的な関わりによって生徒が信頼感を認知することがわかる。

第2節 教師に対する信頼感と部活動指導

部活動は、比較的規模が小さい集団だという意味では、生徒と教師が密に関わる。つまり部活動での関わりは、教師への信頼感を形成する機会でもある。

近年、部活動における体罰や熱中症による死亡事故が起きてから、部活動での指導や運営方法について問題視されたり見直されたりしてきた。文部科学省（2012）によると、「平成10年度～平成21年度の12年間で、学校の管理下の体育活動中における死亡・重度の障害事故を教育活動別にすると、中学校では運動部活動が58%、高等学校では運動部活動61%と、運動部活動の割合が過半数を超えている」ことが明らかとなっている。死因は突然死が約5割を占めているものの、中学校、高校の部活動における指導の在り方や顧問がいかに部活動を管理できるかが極めて重要であることがわかる。

また人間の行動に対して速水（2012）は、「人は“すればできる”ではなく“することができる”とっていないと行動に影響しない」と述べている。つまり教師は“することができる”と生徒に思わせるような、生徒の自信に繋がる指導や支援を行うことが必要だといえる。さらに第1節では生徒の教師に対する信頼感について述べたが、教師の指導に関して古田・五十嵐（2013）は、「教師自身も自他への信頼感が高まることによって、積極的な指導行動をとり、不信感や積極的な関わりを抑制させる」ことを明らかにしている。

以上より、部活動における教師の部活動指導観によって形成される信頼感は、生徒自身

の学校生活や生徒の心身の成長、その後の他人との関わり方に影響するといえる。

第3章 A 中学校における部活動の分析

第1節 調査概要

調査目的：どのような関わり合いが生徒の教師に対する信頼感を生み出し、教師との関係が部活動にどのように影響しているかを検討する。

調査対象：京都府の公立 A 中学校、女子運動部に所属する 1 年生 4 名、2 年生 9 名、顧問（20 代男性）、副顧問（20 代女性）。

調査方法：生徒には顧問、副顧問に対する信頼感と部活動に対する考え方についてアンケート調査を行った。その後、教師に対する信頼感についてインタビュー調査を行った。顧問、副顧問に対する信頼感の測定は、中井・庄司（2006）が作成した生徒の教師に対する信頼感尺度（STT 尺度）を用い、安心感、不信、正当性の 3 つの観点において 4 件法で測定した。また部活動に対する姿勢の測定については、神藤（1998）が作成した部活動自己成長感尺度（SCSSCA）、部活動意欲尺度（ASGS）と青木（2003）が作成した部活動への積極性尺度（MSDA）を基に 4 件法で測定した。その他に、顧問・副顧問に対して信頼感と不信感を抱いた出来事、今の部活動の印象、あなたにとって部活動とは何か、という問いに対して自由記述を求めた。その後、顧問、副顧問に求めること、求められていると思うこととは何か、教師に試合中ベンチへ入ってほしいと思うかのインタビュー調査を行った。

顧問、副顧問には、部活動に対する考え方、部員との関係、部活動での生徒の変化、指導や支援についてインタビュー調査を行った。

第2節 調査結果と考察

以下、4 件法で求めた顧問に対する信頼感、副顧問に対する信頼感、部活動に対する姿勢の結果は、0～12 の範囲において小数第 2 位四捨五入によって求めた平均値を表にしている。またその他の自由回答で求めた回答の結果は、回答人数を○内に示した。

【部活動概要】競技経験者である顧問は、技術指導や部活動の練習内容や休日の活動などの運営等を中心に部活動に関わっている。また非経験者である副顧問は、生徒の精神面や身体面でのサポートを中心に部活動に関わっている。顧問、副顧問ともに、平日の放課後の部活動にも練習に参加している。なお昨年度から顧問は担任、副顧問は副担任として現 2 年生の学年団に所属しており、2 年生とは部活動以外の関わりも大きい。

【顧問、副顧問に対する信頼感】

●信頼感について

〔顧問に対して〕

	1 年	2 年	全体
安心感	6.8	9.7	8.2
不信	6.5	2.3	4.4
正当性	9.8	10.5	10.1

〔副顧問に対して〕

	1 年	2 年	全体
安心感	9.5	11.2	10.4
不信	2.8	1	1.9
正当性	11.3	11.3	11.3

●安心感や信頼感を持った出来事

→前向きな言葉かけ⑤、心身へのアドバイス⑤、
楽しいと感じた②、叱ってくれた②、話を聴
いてくれた①、友達のケガを心配していた①

●不信感を持った出来事

→生徒の主張を取り入れない②、言ってい
ることがわからない②、責められた①、
理由を教えてくれない①

●ベンチに教師がいてほしいと思うか

→はい⑨、どちらでもいい①、いいえ③

「はい」理由：アドバイス⑥、

緊張が和らぐ・心強い・安心する・気分が盛り上がる⑥

「いいえ」理由：プレッシャー③、勝って驚かせたい①

2 年生は 1 年生に比べて、顧問に対する正当性、副顧問に対する安心感が特に高く、不信が低かった。この結果は、13 人中 9 人が試合中ベンチに教師が入ってほしいと答えていたことからわかる。生徒たちは試合を教師に観られることのプレッシャーややりづらさよりも、アドバイスをもらえることの心強さや安心感、また緊張が和らぐ、気分が盛り上がるといった精神面への良い影響を感じていた。さらに、アドバイスがもらえることを理由とした回答と、精神面への良い影響を理由に回答した生徒が同程度の人数いた。これにより教師に対する信頼感は高く、特に安心感が高いことが明らかになった。

教師に対して信頼感や安心感を持った出来事には、技術面の指導よりも褒められたり叱られたり失敗に対して励まされたりといった精神面における指導や支援の機会を挙げる生徒が多かった。中には、丁寧な指導や支援に対して「見てくれている感じがした」ことを挙げる生徒もいた。教師も技術面や精神面での生徒の変化に対して、何らかの働きかけを行っている。このことより、このような高い信頼感を示した結果の背景には、休日や長期休暇でもできるだけ多く長時間の練習時間を確保して熱心に指導してきた顧問や、生徒たちに目を配り丁寧な支援をしてきた副顧問の姿勢があったと考えられる。

一方で、教師に対して不満や不安を感じた出来事には、自分の意見や考えを尊重してもらえず一方的な指導をされていると感じた機会を挙げた。しかし、不信感を抱いた出来事に関しては無回答や「ない」と回答していた生徒が 13 人中 8 人と多くいた。これより不信感については低いことが明らかになった。

【部活動への姿勢】

●部活動に対する姿勢について

	1 年	2 年	全体
安心感	10.5	11.3	10.9
不信	9	10.3	9.7
正当性	8.5	10.2	9.4

●あなたにとって部活動とは

→居場所感を求める回答⑩

(友達や先生といることができる⑥、自分を出せる②、自分やみんなのためになる②)

→自分の感情についての回答⑦

(楽しい③、真剣・本気・頑張ろうとしている③、嫌にならない①)

●部活動の印象

→部員に対する印象についての回答

(明るい・優しい⑦、楽しい⑥、仲がいい④、努力する・やるときはやる④、

やる人とやらない人の差が激しい②、ライバル心が強い①、1年生の挨拶が気になる①)

→部活動全体の印象についての回答

(変化に対する不安①、練習時間への不満①)

部活動への積極性、部活動自己成長感、部活動意欲、すべてにおいて高い数値を示した。

若干ではあるが、1年生より2年生の方が高い結果となった。これは植草・松元(1996)が「部活動への積極性や意欲が高いと学校生活への満足度も高く、また学校生活満足度が時期を追って高まる可能性がある」と述べていることに当てはまる。つまり生徒たちにとって満足度の高い活動になっているといえる。

インタビュー調査から、大会で勝ち上がることや代替わり、技術の向上が部活動に対するモチベーションに影響していることがわかった。顧問は、「向上心を持てるように必ず大会後にミーティングを開く」「部活動は3年生が主役」という指導方針を持っている。そのため、生徒の部活動に対するモチベーションは、顧問の運営方針が影響しているといえる。

また「今の部活動の印象」「あなたにとって部活動とは何か」という項目に対し、「楽しい」「真剣になれるもの」という自分の感情を表した回答があった。しかしそのような自分の感情を表した回答よりも、「みんな」や「仲間」といった言葉を用いた部活動に対する“居場所感(居場所感を感じる感覚)”や“仲間意識”を表す回答が多かった。

以上の回答より、生徒にとって部活動は友達と一緒に過ごすことのできる居場所感であることが大切な役割を担うことがわかった。このことより、回答に多くあった「楽しい」の対象は友達と過ごすことに対する感情であることが予想される。つまり生徒たちにとっては、技術を向上させるための部活動というより、友達と一緒に過ごすための部活動という感覚が大きいといえる。

以上より、大会や技術の向上などによってモチベーションを高めると同時に、部活動での人間関係に居場所感を求めていることもわかった。またここでの居場所感は、教師が積極的に部活動に参加していることや活動時間の多いこと、教師への信頼感が高いことから、部員同士の関係だけでなく教師と生徒との関係も大きく関わっていると考えられる。この

事例より明らかになった、教師の部活動指導観が及ぼす影響を図1にまとめた。

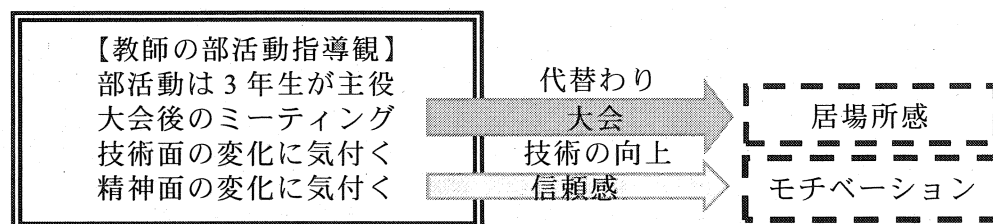


図1 教師の部活動指導観が及ぼす影響

【顧問、副顧問から見た生徒の変化と課題】

まず、生徒の変化について教師は、徐々に技術を向上させたい気持ちが大きくなり、部活動らしい活動に変化したことを挙げた。前年度では技術を向上させたい気持ちよりも楽しく活動したい気持ちが大きく、遊び感覚の部活動であった。さらに、教師に対する態度も徐々に変化したことも挙げた。試合や練習の中で顧問のアドバイスが技術の向上に繋がっていることを実感することが影響していると予想していた。

次に、特に大きく変化したと感じたのはいつかという質問に対して、今年度の夏を挙げた。具体的には、試合や練習の様子において、すぐに諦める態度や、休憩と練習にメリハリをつけられなかった様子に対してである。これは代替わりによるモチベーションの向上が背景にあると考えられる。

そして、部活動の課題として教師は、「主体的に競技に打ち込めていないこと」「チーム意識が薄いこと」を挙げた。前者は、教師への安心感や部員同士の仲間意識が強いことから、何かある度に助けを求める傾向があり、“技術を向上させるため”に主体的に努力する力が弱いことが課題だとしていた。後者は、後輩を育てる気持ちや先輩から教わる気持ち、一緒に高めあうというようなチームとして技術を向上させようという気持ちが弱いことが課題だとしていた。顧問は「学校の友達」から“部活動でのチームメイト”に切り替える」ことを入部時に指導している。しかし、課題に挙げたという事実より、教師と生徒の考えている“チームメイト”が一致していないと考えられる。

つまりこれらの課題は、生徒それぞれでは技術を向上させたいと思っているのに対し“みんなで上手く”よりも“みんなで仲良く”を優先することが原因だといえる。これは「練習と休憩にメリハリをつける」という顧問の指導方針に対して、普段の練習で仲間意識を理由に上手くメリハリがつけられない状況からも窺える。主体的に競技に打ち込んでいたり、チームとして上手になりたいという意識を持っていたりするのであれば、何らかの働きかけがあるべきだと考える。

第4章 総合考察

第1節 事例より

生徒たちにとって部活動に対する居場所感は、部員同士だけでなく教師を含めた人間関係が関わっている。つまり教師に対する信頼感は、生徒が部活動に一番に求める居場所感に含まれる。このことから顧問は、生徒にとっての居場所感を充実させる部活動の運営や指導をするべきである。また、居場所感の形成には生徒の変化に対して働きかける指導が有効であることがわかった。

次に部活動に対するモチベーションに影響するのは教師の部活動指導観であることがわかった。このことから顧問は、生徒の部活動に対するモチベーションをどのように高めるかについて考えを深め、部活動指導に当たるべきであると考えた。なぜなら、教師の部活動指導観が部活動の在り方、生徒の部活動に対する考え方を育てることになるからだ。

そして課題について顧問は、生徒それぞれが技術を向上させたいと思っているのに対し“みんなで上手く”よりも“みんなで仲良く”を優先する傾向を問題視していた。つまり生徒は部活動に対して友達と過ごせる“居場所感”が第一にあることであることがわかった。生徒が周囲の人間関係を優先する背景には、生徒同士、生徒と教師の関係が良好かつ関係性が強いというA中学校の特色が影響していると考えられる。教師は、周囲の人間関係を良好に保つことと主体的に競技に打ち込むことを両立することを望んでいる。

しかし筆者は、それらの両立は簡単ではないと考える。そもそも筆者は、この課題に対して問題意識を持たない。それは、必ず競技に打ち込めることが生徒にとって意義のあることだと言いきれないからである。これは「理想的な切磋琢磨とは何か」とも言い換えられるだろう。“居場所感”を第一に考えることは悪いことではない。

さらに事例では、生徒たちの部活動に対する満足度は高く、教師に対しても十分な信頼感を持っている。そして教師が持つ、「(生徒に)努力できる人間になってほしい」という指導方針についても、生徒の変化より技術の向上に向けて努力しているので達成しているといえる。つまりこの事例では生徒の満足度も高く、教師の指導目標も達成されつつある、理想的な部活動だといえる。技術の向上を求めることで得られる感情や結果による成功体験等は生徒を大きく成長させることは予想できる。しかし追い求めすぎると、勝利至上主義的な部活動に陥る可能性もある。

よって、部活動を通して生徒に何をどこまで求めるか、その他に求めるものとのバランスをも踏まえた部活動指導観を顧問は考える必要がある。

第2節 部活動指導観と信頼感

第1章より、部活動の変遷から部活動における現状と課題を見出した。それは教師の多忙化の解消と、求められる部活動の実現が同時に成立することの難しさであった。そのような課題を克服するためには、シゴキや体罰など行き過ぎた指導を基にした指導方針を見直したり、学級以外のコミュニティや学校への帰属意識が持つことができるといった日本の部活動の在り方の良さを受け入れたりして、部活動の歴史を踏まえた部活動の在り方をそれぞれの教師が考えるべきである。そうすることで、有意義な活動の実現に近づくだらう。ただし、教師の負担感という点において、あくまで部活動は教師の考え次第であるため、教師それぞれの価値観に合った部活動指導観を持って指導に当たるべきだと考える。

第2章より、教師の部活動指導観によって形成される教師に対する信頼感は、生徒自身の学校生活や生徒の心身の成長、その後の他人との関わり方に影響するということがわかった。つまり部活動の望ましい指導、運営には生徒の教師に対する信頼感が必要であるといえる。また、“できる”と思わせる指導・支援は、強制的な指導ではなく生徒の主体性を重視した指導であると考えられる。生徒自身が考えて判断した行動が結果に結びついた時、その教師に対する信頼感と生徒自身の自信にも繋がる。そしてそのような部活動指導観を持った関わりこそが、適切なバランスを保った信頼感の構築と有意義な部活動の実現に必要である。

第3章より、教師の部活動指導観は生徒の部活動に対するモチベーションや部活動の居場所感の充実に影響するという結果が得られた。また、望ましい部活動の運営や指導には生徒と教師の互いの信頼感が不可欠であり、そのような信頼感を形成するには、教師の適切な部活動指導観が必要であった。つまり、適切な部活動指導観と生徒の信頼感は相互に影響しているため、うまくバランスを保つことが有意義な部活動を実現する上で重要である。実際にA中学校の事例でも、満足度の高い部活動を運営できていた。

以上から、部活動が生徒にとってよりよい教育活動になるためには、教師自らの価値観に合った部活動指導観を持って部活動指導に当たること、かつ適切な部活動指導観によって生徒の信頼感を得ることが必要だという結果に至った。そして、教師自らに合った無理のない部活動指導観、居場所感の充実、モチベーションの高め方、生徒に何をどこまで求めるかについて、部活動指導観を深めることが有意義な部活動を運営する上で有効である。

教師が部活動指導観を持つ意義とそれが及ぼす部活動への影響を理解した上で部活動指導観を持って部活動に向き合うことが、有意義な部活動への一歩になる。その次のステ

ップとして、教師の負担軽減や生徒の主体性を重視するためにも、部活動指導観を生徒と共有するのが有効だと考える。家庭や地域等からの多様な要求等を生徒と共に調整する中で、その部活動に合った部活動指導観が確立され、共に理想とする部活動を実現することが有意義な部活動といえるのではないか。

おわりに

今回の研究を通して、有意義な部活動を運営するために必要なことが明らかになった。本研究での課題は、部活動における信頼感に着目したため、部活動以外での生徒との関わりによって生起される信頼感を考慮していないこと、1つの中学校を事例対象としているため部活動の性質に偏りがあることの2点である。

さらに他の部活動の事例においてこれが成り立つか研究を深める必要がある。今後は自己の部活動指導観について見つめ直し、教師自らが関わる部活動においてこれらの検討を図り考察を深めていきたい。

参考・引用文献

- ・天貝由美子（1995）「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」教育心理学研究第 43 巻第 4 号 p364-371
- ・天貝由美子・杉原一昭（1997）「中・高校生の学校適応感と信頼感との関係」筑波大学心理学研究第 19 号 p1-5
- ・青木邦男（2003）「高校運動部員のスポーツ観とそれに関連する要因」体育学研究 48 巻第 2 号 p 207-223
- ・古田伸子・五十嵐哲也（2013）「中学校教師が抱く信頼感と生徒への指導行動との関連」日本教育心理学会総会発表論文集第 56 巻 p759
- ・速水敏彦ほか（2012）『コンピテンス』、ナカニシヤ出版
- ・神谷拓（2015）『運動部活動の教育学入門―歴史とのダイアログ』、大修館書店
- ・三木本温・高橋健太（2008）「部活動のあり方を考える」八戸大学紀要第 36 号 p151-156
- ・文部科学省（2012）「学校における体育活動中の事故防止について（報告書）」
- ・中比呂志・山下秋二（2002）「中学校運動部活動における部活動指導の悩みに影響を及ぼす要因の検討」日本体育学会大会号第 54 巻 p428
- ・中井大介・庄司一子（2006）「中学生の教師に対する信頼感とその規定要因」教育心理学研究第 54 巻第 4 号 p453-463
- ・佐竹圭介（2003）「教育現場における教師に対する生徒の信頼感の研究」九州大学心理学研究第 4 巻 p195-201
- ・佐藤昭雄・松元泰義（1990）「児童・生徒の認知する教師への信頼に関する研究（1）」日本教育心理学会総会発表論文集第 32 巻 p307
- ・神藤貴昭（1998）「中学生の学業ストレスと対処法略がストレス反応および自己成長感・学習意欲に与える影響」教育心理学研究第 46 巻第 4 号 p442-451
- ・植草伸之・松元泰義（1996）「生徒認知による信頼する教師の態度に関する研究（2）」日本教育心理学会総会発表論文集第 38 巻 p293